

# 日本神話の神々

堀 暁

日本神話というと日本書紀や古事記、出雲風土記の記述が思い起こされ、詳しく調べた方も多いと思います。専門家でもない私が今さら屋上屋を重ねるのもなんですから、ちょっと違った方から見てみたいのです。

平安時代後期の東大寺に齋然(ちょうねん)というえらいお坊さんがおられました。その当時の日本を代表する知識人の一人で、十世紀末に中国の皇帝、宋の太宗に謁見を賜り、日本の『王年代記』を奉呈しました。

王年代記というのは日本書紀などに記されている「一書に云う」などの文献の一つですが、散逸して伝わっておらず、宋史に概略が記されています。

「其の年代紀に記す所に云う。初めの主は天中主と号す。次は天村雲尊と曰い、其の後は皆な『尊』を以って号と爲す。次は天八重雲尊。…次は國常立尊。…次は伊弉諾尊。次は素戔嗚尊。次は天照大神尊。次は正哉吾勝速日天押穗耳尊、次は天彦尊(日本書紀の天津彦彦火瓊瓊杵尊:あまつひこひこほのににぎのみこと)、次は炎尊(書紀の彦火火出見尊:ひこほほでみのみこと、山幸彦)。次は正哉吾勝速日天押穗耳尊。次は彦瀲尊(書紀の鵜

草葺不合命：うがやふきあえずのみこと）。凡そ二十三世、並びに筑紫の日向宮に都す。彦瀲の第四子を神武天皇と号す。筑紫の宮より入りて大和州橿原宮に居す云々」

この時代の日本最高の知識人にとって、伊弉冉や素戔嗚、天照大神が都していたのは九州（古代名：筑紫島）の日向の国だったのです。天津国の主、天照大神は日向に鎮座しておられた。そしてその五代目、人としての最初の天皇である神武が東征し橿原宮で即位し、大和朝廷が始まりました。大和朝廷にとって自己の出自は天津神の国であり、具体的には宮崎市周辺だったのです。

出雲の国についても考えてみましょう。大国

主は大叔母さんの天照大神に命じられ国を譲りました。大和にではなく、天津国に譲った、ということは日向の国に譲ったことになります。もちろんその時代には大和の国は生まれていなかったのですから。

日本(大和朝廷)は隋書や旧唐所に記されていように「倭国の別種」であり、別れなのです。本家は倭国であり、日本成立後も倭国は続いていたはずです。三世紀に卑弥呼が治めた邪馬台国がその後身だったと思われます。倭では長らく戦乱が続き、一女子を共立して王としたと魏書には記されています。三〇カ国が一斉に彼女にひれ伏した背景は何でしょう？彼女こそ天照大神の再来として渴望され

たのではないのでしょうか？都が日向だったら、そのカリスマ性は完璧でしょう。

倭国と日本国が暫く併存していたと考ええると、卑弥呼が魏王から「親魏倭王」の金印を下賜されたことが日本書紀に記されていないのも頷けます。別の王朝の話で、大和王朝とは関係ないのですから。

神功皇后紀三十九年条の注に「魏志によると、明帝の景初三年六月に倭の女王が大夫の難斗米などを派遣して、帯方郡に行き、天子に会いたいと朝献した。太守の鄧夏は吏を派遣して、京都(洛陽)に詣でた」。四〇年条注に「魏志によると、正始元年に建忠校尉の梯携たちを派遣して詔書印綬(金印)を奉じ、

倭国にもたらした」とその間の事情を特記しています。新井白石はこれを評して、蛮族の王が僭称したのであろうと書いています。まあ、この時代になると大和からすれば辺地だったのかもしれない。

邪馬台国に関しては畿内説などという突拍子もない説が流布しているようですが、魏志倭人伝に明確に書いてあります。

「(伊都国より)南、投馬国に至る、水行二〇日、南、邪馬台国に至る、女王の都するところ、水行一〇日、陸行1ヶ月。」福岡の南西の伊都国から南へ船で下がるということは、有明海から不知火海を航行するということです。水行二〇日で倭の最南端、開聞岳付近に達

するとすれば、その半分では八代付近で陸行を開始することになります。南方面に陸行というのは球磨川を遡るしかありません。すごい渓谷で、途中に国なぞはなさそうなところですよ。やがて達するのは宮崎と日向になります。邪馬台国から東へ海を渡る1千里で狗奴国に達するとあり(魏志倭人伝では南とありますが、その後に書かれた後漢書では東と訂正されています)、これは四国のどこかでしょう。邪馬台国畿内説では狗奴国をどこに当てるのか、見当もつきません。

というわけで、日本古代史の重要課題、「天津国とは何か?」、「邪馬台国は何処に?」もあっけなく日向で解決してしまったようです。





ホントかしら、とちょっと心配になりますが、その先は皆さんで考えてください。

二十四史というのは皇帝に提出する公文書ですから、その記述にはそれぞれ根拠がありました。尚書庁などに綴じられた外交文書や報告書などです。それを広く参照し、校定し、最終的な歴史書が記されました。現在の歴史家と同じ工程を経ているのであり、昔の人だったから程度が低かったということにはなりません。むしろ時代的に近いので、生々しい史料も利用できたはずです。